



1 (小生の独白) 肉の思い出

成長して記憶が薄れていっても、感情は残りつづける。むしろ、残った感情はワインやウィスキーのように熟成していくのではないだろうか。小生の場合において、たとえば鶏の解体作業がそれだ。

自分が誰と、どこにいたのか、といった情報はことごとくぼんやりしていくというのに、近所で殺される鶏をみている自分の気持ちは、大人になって年をとるにしたがって、より濃く、より深くはっきりしてくる。

原風景としての鶏が解体されていく現場は、子供にとってはおそろしさが占めていたはずだったが、最近、小生の眼にはちがってみえている。

職人がパンを丸めるように鶏の首をしめ、ナイフをあてるとまっ赤な血がぴゅーっと空にむかってふきあげる情景に、ある種の「祭りのはじまり」のように血が騒ぐ。あるいは、性に貪欲な女性とのプレイにおいて「もっと、しばって！」と懇願されているときの目に、あの鶏を重ねている。

大人になっていくにつれて、小生が少年時代にみた光景はわりと特殊な状況だったことだと知った。もちろん、小生が養護施設で育ったということが、出自として珍しいという自覚はある。

小生は思っていた。

「夏には冷房が、冬にはヒーターがある家で、冷え冷えぬくぬくと思いのままに愛されて育てられ、箸が落ちたら洗うのではなく捨てなさい、としつけられるようなご立派な家庭で育った子供も、きっと何かしら小生と同じ類のものをみてきたのではないか」

小生はずっとそう思ってきたのだったが、そういうわけでもないらしい。

べつに小生は、鶏の解体現場を子供が見るべきか否かについて、とくに自論があるわけではない。無垢な瞳に、まっしろな手をふりまわしながら「ニクいこー」と女子学生たちがザワザワとニク、ニク、ニクと発しているのを耳にするとき、その「ニク」を口にした子供たちの幸せそうな顔をうらやましく思うだけだ。

ニクが肉になる過程には、残忍と官能をあわせもった「死」の一瞬を引き受けなければならない。しかし、女学生がどうしてそんな「死」の魅力を知る必要があるだろうか？

いま小生は探偵事務所をひらいて、大なり小なり企業社長たちの人事相談を承っている。会社を背負う社長の多くが生まれも育ちもよい高学歴出身者であったりするのだが、「肉」を「ニク」の感覚でしか話せないボンボンが多い。

女学生たちとちがって、毛並みだけはよさそうな世間知らずの彼らがニク、ニク、と口にするとき、小生はどこかで殺意にちかい感情がわきおこる。それは小生自身の問題なのだが、どうしようもできない。

その肉は、どこからともなく、毛も皮もはがされて、獣臭をおさえた塊でやってくるものではないことについて、小生は同じ男どもに教えたくとも、それは「他人のセックス」同様、言葉で伝えられる種類のものではないということ、何度か社会にでて失敗してから気がついた。

小生が現在、飯をたべていかれるのは、大人になって無邪気なままでニク、ニク、ニクと肉のなんたるかを知らずに育った光の王子、王女たちが無邪気におとしていく金のおかげだったりするのだから、小生はあえて黙っておいて然るべきなのかもしれない。

それでも小生は仕事の依頼がこなかったり、思ったように事がうまく運ばないときがあると、ぽかーんと口をあけて天井をみつめて、そんなときは、鶏肉解体のことだったり、また、別の、似たようななにかについて、とくに思考するのではなく、記憶がうすれたぶんだけ深まった感情を、お風呂で手にすくった湯をじっとのぞきこむように眺めている。

2 ウィスキー珈琲

その前の日も小生は朝から晩まで、事務所でぽかーんと口をあけて、天井を眺めてすごしていた。日が変わって翌日になっても、小生は靴をぬいで、一応は来客用であるところのソファのうえであぐらをくんで、天井を眺めていた。

昼ごろに助手のコバ君がやってきて、「パイセン、なにか食わせてください」と言った。そのときはじめて小生は、自分もしばらくなにも食べていなかったことに気づいた。

「ほら」

サイフォンでいれた珈琲をだすとコバ君はブラックで勢いよくのんだ。そのあとに、「ミルクいれておかわりもらえますか」ときいてきた。「ない。ミルクはない」小生はそう答えたあとに、つけたした。

「マッカランならある」

「えー、この時間から酒ですか」

小生は3分の2ほどブラックコーヒーが入ったカップに、なみなみまでマッカランを注ぎ、トーストを焼きながら、IHヒーターのフライパンで目玉焼きをつくって、コバ君と小生用のランチとした。

「パイセン。それで、テディ陥落計画はどうなったんですか」

「ああ」

「だめだった？」

「非常にまずい事態になっている」

「まさか、アヤナさんがミスったとかですか」

「アヤナから連絡がないときは、テディ側についたか、アヤナに危険があったかだ」

「まじですか??」

「一昨日、『パイセン……ごめんなさい』と言って一方的にアヤナからの電話が切れた」

「それって」

「そうだ。アヤナは、テディをはめようとして、見事にテディにはめられてしまった、ってわけだ」

コバ君は、小生がひさしぶりに金融界の大物、金田優氏からの依頼に失敗しつつあるということに対してなぜか喜んでいる。

「やっば、テディって、あれっすね、プレイボーイって本当だったんすね。アヤナさんだけはなー、絶対に、色恋をしかけることはあっても、色恋に落ちるなんてことは、アヤナさんみたいなチャンネルにかぎって、絶対に、もう、絶対に、ありえないって思ってたんすけどねー」

「ああ。自分も思っていた。テディはたしかにプレイボーイだという前評判があった。だから、アヤナだったら、大丈夫だと思った。身体は、グラビアアイドル。知性は税理士合格者。アヤナを、スパイとして、テディが経営している税務会社に送りこめば、テディならアヤナを雇うだろう。アヤナは.....もともとレズビアンだ。目的のために体を使うことはあっても、心は男に開かない。金なら金田優氏から数百万単位で貢がれている.....。なぜ、アヤナが裏切ったのかわからない」

小生がマッカランをコーヒーカップでガブガブ飲みはじめると、コバ君はバスから降りた瞬間に忘れ物に気がついたときのように、あわてて大きな声で「あっ」と叫んでから言った。

「そういえば、俺、さっきここにくるときにポストに入っていた封筒をもってきたんです。たしか.....差出人はアヤナさんでした」

3 アヤナからの手紙

パイセン、コバ君へ

まさか二人をこんなかたちで裏切ることになるなんて、自分でも思いませんでした。

テディさんと話してみて、はじめてわたしにも、普通に幸せになる権利があるのだと気づけました。こんなに汚れてしまっても、やりなおせることに気がつかせてもらいました。

パイセン。

パイセンの、人を裏切らないところが好きでした。パイセンは金田優が、施設にお金を相当援助していたことを恩義に感じているのでしょうか？ でも、わたしは、テディさんと話してはじめて、本当にわたしたちを支援してくれる人の心のありかたにふれました。金田優は、わたしに数百万くれました。それはわたしがいきるのに十分な金額でした。でも、わたしの身体のあらゆる部分が、鶏のように骨も皮もしゃぶられていたのは事実で、わたしは男性が信じられなくなりました。それは、援助の弱みにつけこんだものでしかなくて、わたしはずっと生きるのが苦しかった。パイセンも金田優を裏切るとは言いません。でも、わたしたちが気がついたときから、思い込まされていた世の中の現実と、また違った視点でみる世の中というのがあるんだ、とわたしはテディさんと話して思ったことだけは、最後に伝えたかったです。

コバ君。

コバ君、わたしはコバ君が秋の芋ほりのあとに、枯葉を集めて焼いてくれる焼き芋が好きだった。あのころは、食べるものも、今のように自由じゃなかったし、まるで動物園の動物をみるみたいな目で、金田優みたいな偽善者が金をちらつかせて、わたしたちを慰みものにしていただけ、唯一の救いは、コバ君やパイセンをふくめて、血がつながっているわけでもないのに、みんなでいるときが本当にたのしかったこと。今は、服を一枚ぬいでみせれば、すぐにどこかからお金がやってきて、焼き芋なんか100本買って、屋上から全部なげ捨てることだってできる。いったい、何してんだろわたしの命、って思っていました。今回、テディさんと話して、はじめてまともに「人」としてあつかってもらったことがうれしかったの。

アヤナ

追伸

パイセンへ。テディ国際税務事務所職員面接の盗聴テープを、最後に送ります。できれば、こ

れを聴いて、あなたもテディさんの本心を知ってほしい。金田優とテディさんの違いに気づいてほしい。わたしはテディさんの前からも、あなたやコバ君、金田優の前からも姿を消します。名前も顔もかえて。

4 (小生の独白)

小生がアヤナと施設で過ごした時間は10年になる。アヤナには水商売の母親と、働かずに一年中酒を飲んでいる父親がいたらしい。父親は酒を飲むとアヤナを殴り、酒を飲んでいないときは、アヤナをみるたびに「掃除と飯をつくるまでは学校へ行くな！」と睨みつけていた。母親は昼に体を売り、夜を酒場で過ごすので、事実上、アヤナと父親は狭いアパートでだいたい二人暮らしなのだったが、アヤナはその両親どちらとも正式に血がつながっているわけではなかった。アヤナの両親はどちらとも結婚と離婚をくり返しており、ある日、実の母親がアヤナを部屋に残したまま、若い男と逃げてしまったので、残されたアルコール中毒の義父の連れ子となったのだ。

小生の場合は、アヤナよりはるかに恵まれていたかもしれないが、それでも未成年で学生だった母親が事故で妊娠させられる結果となり、「産んで育てる」と一度は決めた若き母の結論が、「やっぱりムリ」とある日突然スイッチがきりかわった。虐待がはじまり、通報をうけた児童相談所によって助け出されてからの施設暮らしが小生だ。

アヤナや小生が、互いのそんな過去を嘘偽りなく話せるようになったのは、施設からの卒業が決まった最後の晩のことだった。

施設を卒業して何年もたって、アヤナは税金対策のために膨大な資金を施設に援助している金田優の愛人となり、その無限の財力でアヤナのもともと美しい顔は磨かれた。さらに、もともと学ぶことに貪欲で、知識に飢えていたアヤナは死に物狂いで勉強して、税理士免許も取得した。

小生もまた、零細事務所ではあるけれど、施設のときからの仲間であるコバ君を助手として迎えた探偵事務所を開業して、いくつかの闇スキャンダルを暴きだし、それ相応の収入を得ている。

小生とアヤナが自分の過去をある程度笑い話として話しながら、その晩の赤坂のバーで、小生はアヤナに頼みごとをした。金田優と敵対している相場師、通称テディのスパイになるようにアヤナにお願いしたのだ。

「それはいくらになるの？」

「テディという国際税理士は、とにかく金田さんの仕事を邪魔するらしい。最近、金田さんが運営している闇ファンドの情報が『たなかさぶろう』の名前のブログでつぎつぎに暴露されている。どうやらその正体が、テディ。彼、らしいんだ」

「正義をきどってんの？」

「どうだろう。金持ちなんてみんな同じだろう？」

「そうね。それで、いくらになるのよ」

「いくらほしい」

「5本」

「わかった。場合によっては、アヤナには、テディと寝てもらうかもしれない」

「そんなの、金田となんか毎月、寝ているし、金田の紹介する男たちのおもちゃみたいなものよ。なれてるわ。からだなんて、商品よ、商品」

「そうか。頼んだぜ」

「あたしから連絡がこなかったら、テディに寝返ったか、消されたかと思って首を長くしてまっけてね」

「ああ。辛い世の中だな」

「いまにはじまったことじゃない」

5（アヤナから送られた盗聴テープその1）「テディ国際税務事務所ビル内」

テディ「じゃあ、質問しよう。クライアントが前期の期末に成功報酬を実現したとする。そうすると、納税額が増えるな。それを、アヤナ君ならどう税務処理する？」

アヤナ「それは簡単ですね。がん保険などで繰り延べて前期の法人税率負担を26%にまで繰り戻して還付を最大にします。そうして、翌期移行の税率が下がった軽減税率枠内に課税所得をスムーズしながら解消していく。いわゆる『繰延の基本』の適用がふさわしいと考えます」

テディ「いいね。じゃあ、アヤナ君が融資する立場にあるとして、たとえば流行のミドリムシをつかったような、若手MBA保有者による画期的な事業を考えている起業家相手と、大企業の下請けとして確実に仕事だけはあるが、成長性に欠ける企業の社長。どちらを、どういう理由で相手にするかい？」

アヤナ「そうですね。PEの場合ならアップサイドの分け前をもらえるVCでたっぷりと儲けさせてもらいたいものですが、融資に限った場合、どれだけ取引先が儲けようと金利は変わらないので、安定して長期的に付き合える側を見極めて選ぶという方針で大企業の下請け相手をまずみていくのが正しい選択かとおもいます」

テディ「なるほどね。じゃあこれはどうだろう。アヤナ君が、これから起業する社長にベンチャーについてアドバイスをするとして、とくにどの点について注意する？」

アヤナ「そうですね。ベンチャーでは創業時の社員には、それぞれの分野における能力よりも、スタートアップまでに「徹夜した」や「自腹をきる」といった体育会系におけるメンタル精神面が重視されたり、求められる部分があります。起業社長はそういう意味で創業時の社員に報いるために、その時点で現金を必要としないストックオプションを付与してしまう場合が多いんですね。そして一般的な多くの税理士やコンサルタントは、SOの導入について「金銭の支出を伴わずに社員のモチベーションをあげることができて有効」と説くケースが多いのですが、わたしが勉強した実地レベルにおいては、まったく逆の結果になります」

テディ「どうなる？」

アヤナ「はい。まず、起業が成功して会社の規模が、例のミドリムシのように、予想以上に業績がうなぎのぼりになった場合——ここからはミドリムシの場合ではありませんが——、当然のごとく、求められる社員の質が変わります。とにかく情熱と想いと若さが必要だった状況から、規模にふさわしい専門性と特化した処理能力が必要になってきます」

テディ「うんうん」

アヤナ「そうしたときに、社長としては、能力に見あわないが情熱だけはもっている創業メンバーにはそれなりの給与を払いながらも、タイミングをみつけて、閑職に退いてもらなければ、情とひきかえに会社の命運も尽きてしまいます。ですが、ここでさきほどのSOが問題になってくるわけですが、かりに起業社長が創業直後に『努力』に報いたいとストックオプションを創業社員に付与していた場合、最大行使額1200万だったとして、行使時に10倍になっていたとすると、創業社員たちは、1億2000万から1200万をさしひいた1億800万円を手に入れることとなります。能力をもった中途社員たちが、SO付与後に入社した場合、1億以上の格差が生じることになり、SOの利益で勤労意欲が下がる旧社員と、彼らのために奴隷のように働かねばならないことに不満をもつ新社員のあいだで会社は二つに割れ、評判はいいのにたちあげ数年で消えるベンチャーの多くのパターンとなっていきます。ですが、こうした現状があるにもかかわらず、現在のコンサルの多くが、不用意に教科書どおりのSO提言をすることも問題があると考えます」

テディ「なるほど。いいね、アヤナ君。よく勉強している」

アヤナ「はい。私もテディ国際税務事務所に入社したあかつきには、よりスキルを磨かせていただきたく存じます」

テディ「アヤナ君。君がとても優秀なマネージャーになれることはよくわかったよ。でも、うちで仕事ができるかどうかはまた別なんだ。これから散歩にでよう。最近はどこで誰が盗聴器をしかけているかわからないんでね。いいかい」

アヤナ「はい。実技試験でもかまいません。実技の心得もあります」

テディ「実技……ははは」

6 (アヤナから送られた盗聴テープその2) 「301号線沿いの散歩におけるテディの告白」

ああ、堅苦しい面接はおしまいだよ。神田まで歩いて飯でも食べよう。あそこにはK O牧場っていうちょっとかわった焼肉屋だったり、ラーメンのツムジ、蕎麦のすぎや……なんでもそろっているんだ。世界のヤマモトっていう、うまい鶏料理屋もある。

……なんだろうな。日比谷公園をとおって、皇居のお堀に沿って歩いていくのが好きなんだ。ずっと事務所で数字ばかりをみていて、電車にのってみなよ。電車の人の顔まで数字にみえてくる。まだ俺の話全然していなかったな。俺はアヤナ君が期待しているような、髪の毛から足の爪まで会計や数字が大好きで、無菌室で育ったまっさらなエリートとはちがうんだ。本当をいうと、自分がどうして国際税務事務所を経営しているのか、今でもわからなくなることがある。

10代の頃、俺の生きる目的は、アヤナ君。君みたいなお嬢さんとエッチをすることだった。いやあ、今のことじゃないよ。昔の話さ。でもこれは本当の話なんだ。生きる意味だとか、生きる目的ってのをさ、最近の若者は考えるっていうじゃないか。だけどそれをマジでやってしまうと、勉強なんかできないんだな。頭はガキなのに、体はどんどんデカくなってくる。いま一生懸命勉強して、いい大学入って、一流企業に入れば給料もたくさんもらえて幸せになるって学校の教師は言うけど、俺は思ったね。そのころまで不幸だったら意味ないだろ？ って。

ちょうど尾崎豊が、はやってたころだった。尾崎も歌ってるし、俺はどう自分の脳みそをひねっても、どれだけ考えるふりをして、教師に仲間チクって、内申書？を高く書いてもらって、一流高校、一流大学、一流商社、に入っさ、たしかに金は稼ぐかもしれないけど。それって、かっこいいか？俺は、逆立ちしても、そんな生き方になんのかっこよさも見つけられなかった。そんなことより、当時はチャンネー。短大のお姉さんたちが、俺のようなガキが一生懸命口説いてくるのが面白かったのか、次々に彼女たちの部屋に連れてくれたんだ。

20代になるまでに、俺はいろんな仕事もやってきた。土方もやったし、ホストだったこともある。宅配便の配達でやってた。俺、すごかったんだよ？ 当時全国一位だったからな。20代までの、俺の生きがいは「チャンネー」だったから、別に金稼ぎは目的でも手段でもなかった。とって、働かないと食えないから、働いてたんだけど、働くときも、目の前の仕事を全力でやれば、自然と食えるだけの金がついてまわって、あとは、チャンネーの尻を追いかける。

でも、そんなチャンネー主義だった10代でも、身体で世の中にぶつかってみると、いやでも「格差」というものにぶちあたるんだな。居酒屋でバイトしてる時、職場で偉いのはやっぱりヤンキーの先輩で、こいつに気に入ってもらえないと、冷凍マグロで殴られるんだ。土方では、ちょっと資格をとった学卒が偉そうにしきっている。俺、学校の教師が嫌いだったけど、世の

中にでてみても、教師みたいな奴があちこちにいる、同じくらい、そういう奴らにヘーコラ、ヘーコラする奴がいるんだ、って。

どれだけツッパって、学校なんか燃やしてやらあ、って実際火をつけて追い出されたとしても、次にいったどんな場所でも、また第2、第3の学校と、教師ばかりいるんだ、どこまでいっても、逃げ切ることはできない。そういうことにきづいたのが10代終わりのころでさ。

だけど俺は犬みたいな人間にだけはなりたくなかったから、ぜって一負けないだけの武器がほしい、そう思ったら、そのときの俺に残ってた選択肢が資格だったんだよね。だから10代の終わりから、俺、チャンネーが生きがいつてのを、卒業したんだわ。

20代は仕事の鬼になって、そうだな、今のアヤナ君みたいな、いい意味で冷たい目をしてた。他の男たちは、そりゃあ遊ぶでしょうよ。大学まで、ろくに女もしらず、これまでずっと勉強だけしかしてこなかった優秀君たちは、そりゃあ金と会社名と学歴に集まってくる夜の女たちにどんどん食われていった。俺はそんなとき、遊ぶふりをして、まったく商売女に興味がなかった。実をいうと、いまでも、もう女遊びには興味がないんだ。

そのころ、俺は妻と結婚したんだ。妻は、ほら、さっき面接受けるときに、俺がセンセーってよんでた、鋭い目をした女性がいた。妻は……俺がいうのもなんだが、本当にいい女でさ。10代のころ、500人はモノにした俺だからわかるってのも、あるんだが、妻を前にしたときはじめて、俺は女だとかエッチだとか恋とか、愛とか、そんなことを意識せずに最初から家族ができた、って思った。俺たち、今じゃ一人5万円はする寿司屋にも行けるんだけど、その当時からケンタッキーにいても、ステーキ屋にいても、妻と話していると、なぜだろうな、もっと仕事がしたくなってくるんだ。俺たちは事務所を開いて、とにかく金になるとかならないじゃなくて、仕事がしたかった。

不思議なもんでね。アヤナ君もわかると思うけど、転職には必ず、なにかのイベントが起こるんだよな。もしかしたら、今日ここでこうして俺と内幸町からずっと歩きながら、俺の話を聞かされていることだって、君の転職だったりするかもしれないが、俺、20代の終わりに悪性リンパ腫がみつかった。とにかく仕事の鬼だったから、事務所をたちあげたころなんて、睡眠4時間以上とることもなかった。そんな生活だったから身体こわしたんだな。死がみえたんだよ。

30代になって、俺このまま死んだら、オヤジやお袋より早く逝くことになるだろ。俺さ、両親に迷惑かけてきたんだよ。アヤナ君みたいなお嬢さんは、親不孝って経験ないだろうけどな、俺むかし相当悪かったからさ。中2で家出して、神戸から日本海みにいったこともあるし。一度なんか、ヤンチャしてたらパトカー4台が家まできてなあ。

俺オヤジ嫌いだったんだよ。ほら、ガキには家庭の事情とかわからんだろう？ 俺の兄貴は私立へ行かせてもらったり、ランドセルもいやつ使ってたんだな。俺も私立にいったみたかったんだが、俺にはそんな金がない、と言われた。今からふりかえればよくわかるんだけどよ、事情がな。頭わるいガキには親の事情がわからねえから、なんでも平等じゃないと愛されていないと思ったりするんだわ。でも、パトカーがきたとき、オヤジは何も俺を責めなかった。警官相手に必死にたたかってくれたんだわ、オヤジが。

悪性リンパ腫の話をして20代の終わりにきいたとき、俺はまず、オヤジとおふくろに親孝行できない、ということを感じた。それから妻が長女を妊娠したばかりだった。妻と子供を残して死ぬるか、とも思った。俺はそのときはじめて、俺って、誰かを守りたかったんだ、って気づいたんだな。そのとき、俺は金がほしいと思ったんだよ。

不思議だよな。漠然とさ、チャンネルとやりたいから金がほしい、とか、うまい飯くって、うまい酒のみたい、とかそんな俺の事情じゃなくて、オヤジとお袋のために、妻と子供のために、「みんなを守るために金がほしい」って、俺が本気で言うようになるなんて、不思議だったな。俺さ、昔つっぱってたから、金、金、金って言うの、ダサくていやだった。仕事だったら金になるうがなるまいが、どんな仕事だってやっていたんだが、30代は、金を稼ぐことに専念した。ITバブル、不動産バブル、SNSバブル、それからちょうど5年前の2013年からはじまって、最近おわりをむかえたエネルギーバブル。俺はそのどれも、いいタイミングで乗れて、うまい引き際で負けることなくおろることができた。

いつのまにか富裕層とよばれるだけの資産ができて、最初は純粋に税理士事務所だった会社は今では税務を含めたファイナンス全般だけでなく、いくつもの企業経営そのものに関わるようになって、俺はいつ死んだって、両親、兄弟、親戚、妻子供たち全員を冥土から養えるくらいまでの財力をもてた。だけど不思議だよな。そんな30代最後の年に、俺は施設にあずけられた一人の青年と出会った。

アヤナ君みたいな、エリート路線の女性には、くり返すが退屈に思えるかもしれない。だが、もし俺の事務所で働こうと今もまだ思うなら、ここだけはわかってほしいんだな。もう、テディ国際税務事務所の代表である俺、テディの第一目的は、金稼ぎではなくなってしまったってことなんだ。

俺はね、ちょうど30代最後の年に出会った施設の青年と出会って、40代、いや、これからの目的を、「優雅なる復讐」に費やしたいと思っているんだな。それはさ、世間では、今だって昔のようにバカみたいに「いい学校でて、いい会社は行って、たくさん稼ぎなさい」って言われているだろう？ こういう風潮をさ、たとえばだがな「なぜか、実社会で活躍している人の統計をとってみると、施設出身者が高所得の割合をしめている」という現象が起きたらどうだ？

俺は、今の仕事では、常に自分の担当する企業がどうすれば業績を伸ばせるのかを考えてきた。税務の仕事をしているとだな、なかには、この業界を黒くしている金田グループのように、いかに脱税が可能化を模索提案して、それが発覚すると何も知らなかったことを決め込んで一目散に手をひく、そんな奴らがハバをきかせていたりするんだがな、俺のやりかたはちがう。必ずクライアントを裏切らないかわりに、あきらかに無益な支出には口をだしてきた。するとだな、成長する企業とそうでない企業には、ある決定的なちがいがあったわけだ。

それは、ロール・モデル。もっと噛み砕けば、その会社の社長が、自分の理想ではなくて、自分たちがアノ会社みたいになりたい、という、成功企業の具体像をもっているかどうか、なんだな。その理想をもっている会社は不況でもじっと耐えていける。それがないと、不況になると、すぐに甘い脱税話にのって、金田グループの餌食となる。

俺は、施設の子たちや、世の中の不良の多くが、みんな人生をどこかで捨ててしまっていていつしか薬の売人になっていたり、本当はやりたくもない風俗世界から抜けられなかったりする現実、自分たちの世界の先輩に夢をみられないからなんだと思ったんだ。そういうことに気づかせてくれたきっかけが、30代最後の年にあった施設の青年だった。

それまでは、俺も両親がいない子供たちがいる、ってことは知っていたし、30代で財産を築いてからは、金にかんしての寄付はしていた。だが、寄付じゃだめなんだな。金で解決できることと、できないことがある。

俺、そんなわけです。40過ぎてから計画をはじめて、今NPOをたちあげたんだ。まだアヤナ君のようなお嬢さんは、聞いたことないかもしれないけど、「プレリユード」っていうんだ。毎回毎回、あらゆる業界の現場指揮者クラスの、プロを施設によんで、ぶっちゃけ討論会をする。まあ、活動ってそれだけなんだけど、第一回は俺が講師をやったわけ。みんな、国際税務事務員と自分たちに接点あるわけない、みたいな顔してきてんだな。それでも俺が今、しゃべってみる話をしていると、「俺でもいけるかも」って何人かは思ってくれたりするんだよな。そういうのって、金を何十万援助したって、金じゃ伝わらないんだよ、夢って。不思議なもんで、みんな今インターネットばかりだから、誰かと円陣になって何時間も話したりする経験も少なくなってるな。

だから、アヤナ君も、もしうちの事務所で働いてくれるのだとしたら、俺がこういう人間なんだ、ということを知ったうえで働きにきてほしいんだ。もちろん、税務におけるテクニクについて、教えられることはある。だが、この事務所の俺の目線は今、ゲームそのものにはない。だからアヤナ君のような、野心がある若手の知的好奇心を満たせるかどうかはわからない。そのあたりを俺はちゃんと伝えておきたかった。

さあ、あれが東京税務局だろ……あそこの角を曲ると、ちょっとしたジャズ・バーがあってな。昼は店やってないんだけど、俺がいくと、開けてくれるんだ。そいつ、昼はずっと店でトランペットを吹いてるんだ。Takiって言う名前で、まあそれなりにうれてるプロなんだよ。そいつの店で昼からラムを飲みながらキャラメルコーンってのが俺の最近のはやりってわけさ……。

(ここで、アヤナが盗聴したテープは切れていた)

7 プロローグ

小生は、テディ税務事務所にてアヤナがすらすらとテディの質問にこたえるのをきいていたときは、なぜ、これほど優秀なアヤナがテディに落とされてしまったのか、そればかり考えていた。そればかりか、さきほど読んだばかりのアヤナの手紙というものが、筆跡もぶれていたし、文章も感情が先走っていて、とてもアヤナが書いたとは信じられなかった。

だから、テディの質問にこたえる冷静沈着なアヤナの声をきいたとき、やはりこの手紙が何かのいたずらなんだろうと思って小生は安堵した。そして、どういう風のふきまわしで小生たちにいたずらをしたにしろ、アヤナが計画通りテディの事務所に潜入すれば、それで問題はない、計画通りにことをすすめれば金田優からも追加で成功報酬がもらえるだろうと、思っていた。

だが、そうして得た報酬で何をしたいのか。そんなことまで小生は考えたこともない。考えたくもない。なぜなら、小生が幼年時代に不遇な生き方を強いられてきたのは、愛情というより、やはり金だと思ってきたからだ。小生の未婚の母は、自分を虐げる側になったが、それは本意ではなく金のせいだからだ。その結論を小生は疑ってきたことは一度もない。だから、金を稼げばいいし、稼ぎ方は小生には限られている。

テディが話すのを聞いているうちに、アヤナの手紙が嘘じゃなかったということ、まず第六感で確信した。それでしばらくテディの話の聞いているか聞いていないか小生自身わからなくなっていきながら、頭のなかで、『愛することは、さよならをいうこと』というどこかで読んだ陳腐な恋愛小説のワンフレーズが、エンドレスでくりかえされて、小生は自分がアヤナを好きだったんだろうか、と思った。それとも、テディが500人以上の女と肉体関係をもちながら、奥さんを見つけたときには、身体や顔よりなにより「愛」そのものを感じたと語っていたのが、はじめて自分に愛という感情に気づかせてくれたのかもしれない。たしかに小生はアヤナに対して肉欲をだいたりしなかった。だが先日再会したときに、元気そうだった彼女の笑顔がうれしかった。アヤナには自分の出生の事実を告げることができた。

つぎに、テディの話の内容というより、その声に、小生は「肉声」を感じていた。インターネットで過剰に乱発される虚声ではない、ニク声でもない、肉声。一人の、人間が人間に真剣に向き合って語っている声だ。アヤナに対して語られているその内容は、そっくりそのまま小生にもあてはまることだった。小生も子供のころに将来の夢を紙にかきなさい、といわれて、一日中、一文字も書けなかった体験を持っている。あのとき鉛筆を折って、投げ捨てたら、「だからお前は」と教師が言ったものだった。

「テディに会ってみたい」

コバ君が伏目がちに小生の方をむいて口を開いた。

「そうだな。アヤナの行方も気になるし」

小生とコバ君は、二人とも30を目前にしたいい年をした大人だったが、もしも自分たちが変われるチャンスがあるのだとしたら、ここを逃がしたら次がないように、少なくとも小生は思っていた。

気がついたら、二人ともテディがいる新橋へ向っていた。